

## 宮本 輝 「幻の光」 論

——〈幻の光〉を見る女——

### はじめに

宮本輝「幻の光」〔新潮〕昭和五十三年八月）は、主人公・ゆみ子の語りによって物語が展開する。作品（全六章）は、一章と六章が物語現在の昭和五十三年であり、中間として、二章（昭和三十三年・ゆみ子小学六年生）から五章（昭和五十二年の冬・ゆみ子三十一歳）がある。内容を簡単に言うと、一章で前夫「あんた」の自殺が語られ、二章以降にゆみ子の少女時代の過去や前夫への思い・その後の人生等が描かれる。最終章の六章は、時間的に一章に接続しており、現在のゆみ子の心情が語られている。

つまりこの作品は、平井修成氏が言うように、「最初の夫の死を解明する物語に見えながら、実は、その構造は倒立していて、最初の夫の死を動機として、様々な死のエピソードを『わたし』が経めぐる物語<sup>1)</sup>」という性格を持っている。「あんた」への思いを中心とするゆみ子を考えることが、作品を読むことになる。

彼女の特徴の一つは、現実とともに想像の光景を見ることである。

藤 村 猛

それは、作品冒頭の曾々木の海の場面から表現される。

ほれ、ここらでは滅多に見られへんような緑色ののつぺりした海に、ひとかたまりになってちかちか光ってる部分がありま  
すやろ。魚の大群が海の底から湧きあがって、波間で背びれを  
のぞかせてるみたいやけど、あれは何でもないただの小さい波  
の集まりなんや。目には映らへんけど、ときおりああやって光  
が海面で踊りはねるときがあって、さざ波を一部分だけ一斉に  
光らせるんや。それで遠くにいる人の心を騙すのやて、お義父  
さんが教えてくれはった。人間の、いったいどんな心を騙すの  
かはつきりとは判らんけど、そう言えばわたしにも、何かした  
ひょうしに、あのさざ波の光の群れを、我を忘れて見つめてる  
ときが何遍もありました。

(一)

「さざ波の光の群れを、我を忘れて見つめてるときが何遍もありました」とあるように、彼女は「人の心を騙す」光景に牽きつけられる。その光の果てには死があるのだが、平井氏も言うように、「騙

すものは、同時に、誘うものであ<sup>(1)</sup>り、「心の在りようによつては、それは格別に心地よいものでもある」<sup>(2)</sup>。事実、この時のゆみ子の「心の在りよう」は「心地よいもの」である。だが問題は、それが彼女の苦しみを誘う想像とともに存在することである。このことは、彼女が想う「あんた」の場合に顕著である。

こんな日は滅多にないのやから、お蒲団とか座蒲団も干さな  
あかんし、ほかにもうんと用事がある筈やのに、きまつて体が  
だるうなつて何もする気もおこらへん。雨上がりの線路の上を、  
背を丸めて歩いていくあんたのうしろ姿が、振り払うても振り  
払うても心の隅から浮かんでくるのや。

(一)

「雨上がりの線路の上を、背を丸めて歩いていくあんたのうしろ姿」は実見のものではなく、彼女の想像の産物である。想像の中で、彼女は死に行く夫に寄り添う。いわば「死」に心を寄り添わせ、死と共にいる<sup>(3)</sup>（平井氏）と言つてもいい。

なぜ彼女はそうするのか。そして、何を得るのか。彼女の亡き夫への思いや彼女の特質を考察していく。

## 一 死 と 幻

この作品では、夫の死以外に死と関連するものとして、彼女が暮らした「トンネル長屋」のラーメン屋の心中や祖母の失踪があり、自殺願望の男（四章）や「とめの」の遭難しかけた事件（五章）も

ある。

ゆみ子はそれぞれに衝撃を受けているが、前述したように、前夫に関わる時に多く幻を見る。次の引用は、前夫の自殺直後の狂乱の中で、夫の死の理由を追求しているときのものである。

私の心の奥の、もうひとつの心に、雨あがりの線路の上をとばとば歩いているあんたのうしろ姿が、もうまざまざと映りつづけるのでした。水色のワイシャツの上に灰色のブレザーを着て、ちよつと背を屈めた独特の格好で、ひとり黙々と夜ふけの線路を歩いているあんたのあとを追いつつながら、わたしは一所懸命、その心のうちを知ろうとやつきになってました。

(一)

彼女が想像していると言うよりは、想像が彼女に訪れている感がある。そして、「そんな日が何日もつづいた」あと、彼女はより具體的な幻を見る。

そのうち、わたしの前を歩いているあんたが、前方から吹きつけてくる冷たい風に髪の毛をおおられながら、ときおり立ち停まつて振り返るようになりました。くらがりの中でわたしを見ているあんたは、自転車盗んで帰ってきた夜の、あのやぶにらみになつた別の顔やつた。わたしはその顔を見ると、ただむやみに哀しいなつて、足もすくんだようになり、遠ざかって小さくなつていくあんたを、じつと見送つてしまふんやつた。

(一)

そこでは「あんたが、前方から吹きつけてくる冷たい風に髪の毛をおおられながら、ときおり立ち停まって振り返るようになる」。ゆみ子が幻を見ていると言うよりも、見せられたと言った方がいいのかもしれない。

彼女が再婚して、曾々木に移ってからと同様である。次の場面は、自殺願望の「三十前後の男」の後を追いかけていた時の幻想である。

道には、わたしとその人の姿しかありませんでした。頭に巻きつけてるマフラーを、毛糸の手袋で包んだ掌で押さえながら、わたしはさぶ濡れになって、あとを尾けて行つた。そのとき、黒々とした空も海も、波しぶきも潮のうなり声も、氷のような雪片もかき消え、わたしは夜ふけの濡れそぼった線路のうへのあんたと、二人きりで歩いていたのでした。それは、どれほど力いっぱい抱きしめても、応じ返してはくれへんうしろ姿やつた。何を聞かれても、どんな言葉をなげかけられても、決して振り返らへんうしろ姿やつた。血をわけた者の哀願の声にも、決して耳をかそうとはせんうしろ姿やつた。ああ、あんたは死にただけなんや、理由なんか何にもない、あんたはただひたすら死にただけなんや。そう思た瞬間、わたしはあとを追うのをあきらめて、その場に立ちつくしてしまいました。あんたはみるみるうちに遠ざかつて行つた。

(四)

三十男が「あんた」に変わり、「夜ふけの濡れそぼった線路のうへのあんたと、二人きりで歩いていた」と、ゆみ子は「あんた」の

死の場面に参加して、あんたは死にただけだと感じ、「あとを追うのをあきらめて、その場に立ちつくしてしま」う。

この追跡の後、民雄はゆみ子の質問―「うち、あの人がなんで自殺したんか、(中略)……なあ、あんたはなんでやと思う?」(五)―に、「人間は、精が抜けると、死にとうなるんじゃない」(五)と言う。それを受けてゆみ子は、前夫の不幸を実感する。

あんたのうしろ姿が、浮かんでは消え、消えては浮かんできました。そのとき、わたしの心には、不幸というものの正体が映ってました。ああ、これが不幸というものやなあ、わたしはあんたのうしろ姿を見ながら、はつきりとそう思たんやつた。(五)

その後、ゆみ子は、眼前の曾々木の海を見て想像する。

そして、そんな病氣にかかった人間の心には、この曾々木の海の、一瞬のさざ波は、たとえようもない美しいものに映るかも知れへん。(中略) ほれ、また光りだした。風とお日さんの混ざり具合で、突然あんなふうに海の一角が光り始めるんや。ひよっとしたらあんたも、あの夜のレールの彼方に、あれとよく似た光を見てたのかも知れへん。(中略)

もうそこだけ海ではない、この世のものではない優しい平穏な一角のように思えて、ふらふらと歩み寄って行きとうなる。

そやけど、荒れ狂う曾々木の海の本性を一度でも見たことのある人は、そのさざ波が、暗い冷たい深海の入口であることに気

づいて、我に返るに違いありません。

(一六)

ゆみ子は美しい光の向こうに死を感じ、彼が死（轢死）の彼方に幻の光を見たと思う。注意すべきは、幻を見るゆみ子の特性（受け止め方）で、そこには死と生が共存している。普通、人は死への誘いを拒絶するし、〈幻の光〉を見たとしても吸い込まれないようにする。ゆみ子は想像を膨らませ（もしくは膨らませられ）、夫の死の場面に自ら参加して、前夫に置いて行かれても、否、置いて行かれるからこそ、その後も前夫への話しかけを止めない。彼女は前夫の死を見つめることにより、前夫と同じ状況にしようとしている。

## 二 痛み（不幸）と安堵（幸福）

前節で見てきたように、ゆみ子には死と生の受容という特性がある。これは彼女の物事の受け止め方の特殊性——不幸と幸福の共存・受容——にも通じる。

例えば、祖母が失踪し、警察から床下に死体があるかと搜索され、ゆみ子は不安になり不幸を感じる。が、その後に安堵が訪れる。

畳も家具もちゃんと元に戻した筈なのに、なんや模様変えした馴染まん部屋に寝転んでるような気がした。寿命が来て、小そうにわなないてる蛍光灯を見ながら、わたしは、生まれて初めて味わうような安堵感に包まれてた。安堵とは、きつとあのときの、あんな心を言うのやと思う。

(二二)

不幸の直後に訪れる「生まれて初めて味わうような安堵感」。このような状況は、酒井英行氏が言うように、「恩寵が訪れ<sup>(4)</sup>」たようにも思えるが、「恩寵」と言えるのか。また、氏は「恩寵がもたらす安堵ではない真の安堵をこそ、ゆみ子は自らの手で掴み取らなければならぬ<sup>(5)</sup>」と続けるが、ゆみ子にそういう意図があるかは疑問である。

次の引用は、ゆみ子が再婚のため輪島に向かう車中のものである。

わたしは輪島に着くまで、ずっと外を見つめたまま、死んだあんと話をした。何を話したのか思い出すこともでけへんけど、もうそのころには、自分ひとりになると、無意識のうちにあんに話しかけてしまう習慣がついてしもうてたんです。そして、わたしの話しかけているあんたは、線路を歩いて行くうしろ姿のあんたやった。思い描くだけで心が冷とうなってしまうそのうしろ姿に話しかけると、わたしのもうひとつの心は、何かにのめり込んで酔いしれていくような、不思議な喜びをほつきりと感じてしまうのやった。

(三三)

「思い描くだけで心が冷とうなってしまう」いながらも、「もうひとつの心は、何かにのめり込んで酔いしれていくような、不思議な喜びをほつきりと感じてしまう」。元々、ゆみ子は幸福と不幸を分けないう傾向があったが、前夫の自殺によって、「心の冷たさ」と「不思議な喜び」を感じるようになる。

逆の例としては、再婚して「しあわせな生活」を送っていても、

彼女は「冷たさ」や「恐ろしさ」を感じている。

再婚してよかったなアと、私は思いました。ちょっと大袈裟なくらいに、関口家でのしあわせな生活のことを、ひと月にいっぺんの割合で書いてお母ちゃんに知らせてました。そやのに、台所で友子ちゃんと一緒に片づけものをしながら、風呂場から聞こえてくる民雄さんと勇一の笑い声に耳を傾けると、ああ、あれがあなたと勇一やつたら、どんなにしあわせやろと思ってしまう。そう思い始めると、腰のあたりがすうっと冷とうなり、何やらじつとしていられへんような恐ろしさにひたってしまうのでした。

(四)

彼女は「あなた」のことを思うと、「何やらじつとしていられへんような恐ろしさにひたってしまう」。これは、「あなた」が「ひたすら死にたいだけ」だったと気づいた後に強くなり、彼女は幸せに背を向ける。

尼崎の、あのトンネル長屋に帰っていきなかった。もうどうでもええ、しあわせなんか欲しいない、死んだってええ。嘔きあがってはちぎれ飛んでゆく大きな波と一緒に、そんな思いが、しきりに胸の中で生まれてくるのでした。わたしは子供みたいに大声で泣いてた。あなたが死んだということを、わたしはそのとき、はっきりと思い知ったのやった。ああ、あなたは何て寂しい可哀そうな人やったやろ。涙と鳴咽で、わたしは顔を歪

めながら、いつまでも泣いていました。

(四)

ゆみ子は「あなたのうしろ姿」に、「ああ、これが不幸というもののなんやなあ」と、「はっきりとそう思たんやった。」(五) だが、そう思いつつも「わたしは、いつしかうつらうつらと温い海に浮かんでる心持になつてい」き、海や雨の音も「雨上がりのレールの上を、とぼとぼ歩いて行くあなたのうしろ姿も遠くに押しやって、深い安堵の中に横たわつてい」(五) くのである。

逆に、「あなた」を失ったことによる「地団太を踏むような悔しさと哀しさ」が、ゆみ子をこれまで生かしてきたとも言える。夫を失った悔しさや悲しみは、夫への問いかけとして、彼女の「支え」となっている。

最終章で彼女は、「あなた」に話しかける。

ああ、やつぱりこうやってあなたと話し込めると気持ちがええ。話し始めると、ときおり体のどこかに、きゅうんと熱っぽい痛みが湧いてきて、気持ちがええのです。(六)

不幸(恐ろしさ)と幸福(欲び)が彼女の中で共存している。これがゆみ子である。

三 「あなた」とゆみ子——結婚するまで

ゆみ子の自殺した元夫、「あなた」と呼ばれる男は如何なる人間か。

彼がゆみ子の前に登場したのは、ゆみ子（小学六年生）の祖母がいなくなり、警察が部屋の下を掘った翌日のことであり、彼は中岡（同じアパートの住人）の後妻の連れ子であった。

わたしが学校から帰ってくると、あんたはトンネル長屋の横にある高い煉瓦塀に、ボールを投げつけて遊んでた。青い野球帽を斜めにかぶってました。見たこともない男の子がひとりで遊んでたから、わたしは横目で盗み見ながら通り過ぎたんやけど、何となく気になってしょうがなかった。別にどこ言うて特徴のない男の子やのに、なんであのとき、あんたのことが心に残ったのか。わたしは、夕暮れまでひとり煉瓦塀にボールを投げつけてるあんたを、遠くから何度も窺うてました。（二）

転校生はそれだけでも気になる上に、彼は「勉強のできる、顔立ちの整った男の子」（三）であり、二人は「子供のころから仲の良」（二）い関係になる。そして、ゆみ子と同じように、彼も中卒で就職する。ゆみ子は弟のため、彼は「中学三年生のときお母さんを亡くして、血のつながらんお父さんの、いわばやっかいもんになってしまったことへの遠慮から」（三）であった。同じ場所に住み環境も似ていることなどから、彼への恋心も募り、二人は親密になる。

わたしにはたくさん恋敵がいてました。その恋敵の殆どが高校に進学してしまうと、わたしは小さな部屋にあんたと二人きりで入りこんだような気がして、心をときめかせたもんやった。

それからおとなになるまでの期間、いろんなことがあった。いろんなことはあっても、わたしのあんたに対する気持は一度も萎えたことはありませんでした。（三）

ゆみ子の愛情は一貫していて、彼も彼女へ好意を持つ。

あんたの口から、わたしを好きやという言葉を聞いたとき、わたしはどんなに嬉しかったことやろ。生まれてこのかた、あともさきにも、あんな嬉しかったことはありませんでした。（三）

その頃の二人の回想として、次のようなものがある。

随分昔、まだ二人が二十歳になるかならんかのころ、わたしの目の下にばらばらに散ってるそばかすを見ながら、あんたがあの独特の、どこかほかのところを見つめるような視線を注いでこう言うたことがある。「ゆみちゃん、まだほかにも、ぎょうさんそばかす隠してるのんと違うかア？」（二）

ゆみ子はその言葉を「何やら怪し気な言葉」と受け取り、「女の体を指すと思っていた。が、彼の死後にはそうではないと気づき、「あのそばかすの意味も、考えれば考えるほどややこしくなってる」。ゆみ子は色白の女性であり、そばかす（黒）は光と影のような対照として白を引き立たせるし、在ることが一種の謎である。似たもの



として、曾々木の「たとえようもない美しさ」のさざ波の光」暗い冷たい深海の入口」が考えられる。ゆみ子のそばかすは、彼女の闇を示しているのかもしれない。前節で見た幸福と不幸の共存という独自性と、女の「性」を暗示したものかもしれない。ゆみ子自身、前夫に「せっせと話しかけてる自分を気色悪い女やと思う」(一)し、再婚相手の民雄も「何を考えとるのか、さっぱり判らん女やい。」(五)と感じている。不幸と幸福の共存が彼女の不可解さを生み出しているように、同じような働きを為すのが彼女の性である。

#### 四 ゆみ子の思い——性

この作品で、ゆみ子の性は初潮として登場する。それはゆみ子の選択ではなく、所与のものである。祖母の失踪と同日で偶然すぎる感もあるが、パチンコ屋からゆみ子は、「スカートの前と後を手で押さえて、ゆっくりゆっくり歩いて帰」(二)る。そして、「家に着くと、奥の三畳に入って破れ穴だらけの襖を閉め、じっと正座しました。」(二) この正座する姿は印象的である。

今でも、月のもののかかりに、きまつてわけものう冷んやりとした寂しい気持に襲われるのは、きつと初潮のあった瞬間、パチンコ屋の冷房で氷みたいに冷たうなつてしもた汗に包まれて  
せいやと、わたしは思うのです。(二)

ゆみ子の性には、この寂しさと違和感がまわりつく。

その後ゆみ子の母は、「娘になったんやから」長いスカートを穿くようにと言い、生理がこないとのゆみ子の言葉に、「始めのうちはそんなもんや。」と慰める。そして、「寝転んでるわたしの頭を、自分の膝に乗せ」、「わたしの髪の毛を三つ編みにして遊びながら」(二)、会話を交わす。ゆみ子は「ああ、お祖母ちゃんはどこかで死んでしもたに違いない、(中略) わたしにもちゃんと初潮があった」(二)と「不思議な安堵感」(五)を得る。

その後、前夫からそばかすのことを言われて、「女の体」のことかと思い、「ほんとは煩わしいてたまらんくせに、あんたの指にあわせてるうちにその気になってくる自分の女の部分を、まだ一緒になるまえから言い当てられてたんやと、わたしは思い込んでた」(一)。彼女にとって、性は煩わしさと快感が共存している。

同じ状態は、再婚相手の民雄との初めての夜にも起こる。

いったい人間の心とは何やろ。蒲団や枕の、自分のものではない匂いに、いつまでもなじまんま、わたしは何度もそうしてきた相手を受け入れるように、自然に体を動かしていました。そのときだけ、死んだあんたも、あんたのうしろ姿も頭の中にたたみ込んで、ごうごうとうねってる風と波のただ中で、うっすら汗をかきつづけてるのです。(三)

ゆみ子は性に没入もしないが、拒否することもない。それは四章で、前夫に似た男を追った後、浜辺で泣いていた彼女を民雄が見つけ、泣く理由を問い詰められたときにも出てくる。

どうしてあのとき、あんな言葉が口について出たんやろ。わたしはしばらく民雄さんとにらみ合ったあと、「前の奥さんと、うちと、どっちが好きや？」自分でも驚くほどの媚びを込めて囁いたんやった。

(四)

彼女は心身ともに、だれかと繋がっていたのであろう。その一つが性であり、それが他者との繋がりを保つ働きを持つ。もちろん彼女は心情レベルでも、他者との関係や絆を大切に思っていて、それ故に動揺することもある。例えば「とめの」から、民雄の前妻が「恋女房」であつたことを知らされ、

「恋女房」という言葉が、いやに心にへばりついて離れへんのでした。わたしは、死んだ奥さんに対してやきもちを焼いている自分を、どうにも押さえることがでけへんようになってきた。蒲団をはぐと、民雄さんを座らせて、「嘘つき」と叫びました。あんなふうに逆上するときの女の気持は、女の自分でさえ説明がつかへんみたいや。

(五)

ゆみ子は嫉妬する感情も持っている。だが、彼女にとって一番の謎は、やはり前夫の死である。

## 五 自殺する「あんた」

勇一が生まれて三ヶ月目に、「あんた」は「理由も判らん自殺」

(三)をする。その十日前に自転車を盗まれ、金の無かった「あんた」は甲子園まで歩き、別の自転車を盗んでくる。

勇一にお乳を吞ましているわたしの横にごろんと寝そべって、あんたは長いことじつと天井を睨んでた。二十五歳にしては老けた感じが、痩せた頬つぺたのあたりに浮かんで、それが子供のころから少しも変わってない赤味がかった唇を、よけいに赤う見せてました。

(二)

彼は得意先の機械屋に入った、三十すぎの元相撲取りの話を始める。

まだチョンマゲを結うたままで、それが十八か九の若い運転手に顎で使われとつた。俺、あのチョンマゲを見ると、たまらんなような気持になってしもうた。

(二)

「ふうん、なんで？」というゆみ子の問いに、「判らへん」と答え、「あのチョンマゲを見てると、なんか元気がなくなってくるんや」と言う。元相撲取りのチョンマゲは挫折の象徴かもしれないが、夫はまだ二十五歳の若い盛りであつた。そんな彼が鉄道自殺する。

現場は杭瀬と大物の間で、電車を運転してた人の話では、あんたは線路の真ん中を進行方向に向かって歩いてたんやそうで



す。ゆるいカーブになって、人間が照明灯の中に入ったときは、もう間に合えへん距離やった。警笛の音にも、ものすごいブレーキの音にも振り返らんと、あんたは轢かれる瞬間までまっすぐに歩きつづけてたんやて。

(一)

自殺の動機がゆみ子たちには判らない。死体からは、薬物もアルコールも検出されない。

体も健康やし酒も飲めへん、賭け事もせえへん、他に女関係もない、死んでしまわなあかんほどの借金もない、それどころか初めての子供が生まれてまだ三ヶ月で、男としては張り切っている時期やった。警察の人も首をかしげるほど、死ぬ理由は何ひとつ見つかれへんかったんです。

(二)

しかし、彼の内部の闇は広がっていた。子供が生まれたことがプレッシャーになっていたのかもしれない。「俺、中学しか出てないし、甲斐性なしやし、一生金持ちなんかになれへんやわ」(一) 必要以上悲観的になっていたとも想像される。しかし、これが他の人と違うのは、彼の「ひんがらめ(やぶにらみ)」の存在である。「斜視を、その人間が人生に正対する勇氣を持たないことの象徴」(平井氏)とするのは言い過ぎの感もあるが、前夫の場合には当てはまるだろう。

そういう彼に対して、ゆみ子は「わたしは結婚してからうんとしあわせになった」(二)と励ます。が彼は「へえ、……そうかあ」

と言、「ひんがらめ」がきつくなる。

赤う充血した左目は、さっきよりもっと外側に向いてしめて、まるであんたと違う別人の顔になってました。いつもならすぐに元に戻るのに、なんでかその日は、なんぼこすつてもやぶにらみは直らへんかった。

(二)

前夫はゆみ子の言を素直には受け止めず、二人には隙間ができる。

ゆみ子は「あんたでありながらあんたではない別の顔が、いつまでも心に焼き付いて消え」(一)ず、「その、ときどき変な発作を起こす目が、じつはあんたの本性なんやと、なんでそのとき思い当たることがでけへんかったやろ。それから十日後に、突然自殺してしまいう気配を、なんでわたしは、外側に向いてしもた左目から察してやることができへんかったんやろか……」(二)と後悔する。彼は他人には見せない顔をゆみ子には見せたのだが、彼女には彼の悩みが分らない。彼は顔立ちの整った顔と落ち込んだ別の顔(ひんがらめ・本性)に分裂し、いつしか不幸に飲み込まれていったのだろう。後に民雄は、前夫は精が抜けて死にとうなつたのではと言う。ゆみ子は、それを一歩進めて、次のように思う。

体力とか精神力とか、そんなうわべのものやない、もっと奥にある大事な精を奪っていく病気を、人間は自分の中に飼うてるのやないやろか。そうしみじみと思うようになったのでした。

(六)

「もつと奥にある大事な精」、つまり「生命」そのものを喪失していったのが、「あんた」だったのではないか。彼は若妻と幼子よりも、死を選ぶ。そして、自分の歩むレールの果てに、〈幻の光〉を見た（とゆみ子は推測する）。それは、他者との関係を拒絶する美しい幻である。（曾々木の海の見せる幻も「たとえようもない美しいものに映」り、人を飲み込む。）

「あんた」は〈死〉に、幸せを感じたのだろう。同様に、ゆみ子は夫を失ったことへの悲しみは重く続くとしても、彼女は「悔しさと哀しさのおかげで、きょうまで生きてこれたのやった」（五）のだし、「あんたのうしろ姿に話しかけることで、危うく萎えてしまいうような自分を支えつづけてた」（五）のである。彼女は前夫と同じ生と死の狭間にいて、痛みとともに安堵（快感）を得ている。

## 六 ゆみ子を支える女たち

だが、ゆみ子は空想の中でだけ生きる女性ではない。前夫の死に執着しながらも、現実生活に生きる女性である。そんな彼女を応援する人物として民雄や義父たち以外に、二人の女性——漢さん」と「とめの」がいる。

漢さんは、再婚を迷っていたゆみ子の背中を押した女性である。ゆみ子は前夫の思い出から逃げるために、能登での再婚を決める。しかし、尼崎駅で母の涙を見て、能登行きをやめようと思う。そのとき、電車待ちをしていた漢さんがそばに寄ってきて、「どこ行くねん、こんな朝から」（三）と問う。

漢さんは、朝鮮人で、女のくせに男みたいに髪を刈り上げ、男物の作業衣を着て、ひとりで軽トラックを運転し、廃品回収業をやっている人でした。実際は三十八歳なのに、もう四十七、八にも見える、赤ら顔の頬骨の張ったおばさんでした。（三）

ゆみ子が再婚のための能登行きを告げると、漢さんは天王寺行きを予定を変えて、大阪駅まで付き添い世話を焼く。そのことで、ゆみ子は曾々木まで行くことになる。

雷鳥二号の来るのを、漢さんはホームにまで入って一緒に待ってくれはった。何か言いたそうな顔して、ときどき口を開きかけてはそのままつぐんでしまう漢さんと、汚ないなりした二人の子供を見てるうちに、わたしはなんでか涙がいつぱい浮かんできた。これまで一度も親しいに話をしたこともない漢さんが、なんでこうやってホームまで送ってくれたんか不思議でした。「これからが女ざかりや。……がんばりや」（三）

こわい顔でそう言いはった。

（三）

列車を見送った漢さんは、「じつとホームに立ちつくしたまま金歯を光らせて笑いはった。それは知り逢うて十年もたつ漢さんが、わたしに見せた初めての笑顔」（三）であった。

ゆみ子は「不安や心細さや、後悔が重なり合って揺れ動いてた、あのときの私の心に、漢さんはいったい何を注ぎ込んでくれたんやろか。」（三）と疑問に思う。漢さんから与えられたものは前に進む

力であり、人間の善意である。これらは曾々木に行つて、民雄や友子たちに会つたときに生きる。

わたしは、ふと漢さんの言葉を思い出した。友子ちゃんの傍に行き、「きょうからわたしがお母ちゃんやで」と言うた。そのとき、ぱつと顔をあげて笑い返した友子ちゃんの、たしかに女の子に違いない匂いを鼻先に嗅いだ瞬間、わたしはそれまで頼りなげに丸めてた自分の気持ちを、しゃきつとまっすぐに伸ばすことができたんです。この子は、わたしが来るのを、ずっと楽しみに待っていてくれたんや、そう思うと、にわかに元氣が出てきて、湿っぽい家のたたずまいも、(中略)もう何年も昔から慣れ親しんできたもののような氣がしたんです。(三)

ゆみ子は曲がりなりに、新しい家族と馴染んでいく。そういう生活の中で、彼女に力を与えたのが「とめの」であつた。彼女は中年の女性で、時折、海に出て漁をしていた。

とめのさんは慎重で、荒れる恐れのある日は、けつして舟を出さへん。それに村の年寄りでさえ一目置くぐらい、雲や風の具合でその日の天氣を予知する術に長けてるのやつた。(五)

ある冬の早朝、ゆみ子は漁に出る「とめの」を見る。

もう着れるだけの服を着込んで、雪の敷きつめられた砂浜を歩

いて行くとめのさんは、朝焼けの真っ赤な光にふちどられ、何か神々しい姿を浮かびあがらせてるのでした。わたしは刺すような冷氣も忘れて、とめのさんに見とれてました。(五)

「とめの」の「何か神々しい姿」は、失踪した祖母や前夫の姿とは対照的である。

ゆみ子が蟹を頼んだ後、「とめの」の舟は沖に出て、「風のない静まりかえった海の真ん中に、金色の粉のような光」(五)の中に溶け込んでいく。だが、海は急激に荒れていく。

みんなが遭難を心配している中、「とめの」はバスで帰ってくる。沖に出たものの「あんまり静かすぎて、だんだんいやな予感がして」、「舟を戻し」(五)たこのことであつた。

ゆみ子が彼女の家、蟹の代金を払に行くと、「とめの」は不意に聞く。

「前の亭主は、なんで死んだんじゃ？」わたしはそれまでいろんな人から訊かれて、そのたびに口からでまかせを言うてきたのに、ぶっきらぼうなとめのさんの大声に合わせ、思わず、「自殺したんです。電車で轢かれて」と答えました。「あれえ、そりゃあ、辛いことじゃったなァ」とめのさんは、しばらく何かを考えてはつた。(五)

その後、「とめの」は、恋女房であつた民雄の前妻の死を語る。

ゆみ子は「とめの」の漁に出るときの「神々しさ」や、凡人を越

えた知力・勘への尊敬の念と遭難しかけた事件により、前夫の死を素直に語る事ができたのだろう。「とめの」の持つ「神々しさ」は人間の持つ光を感じさせるし、近親者の死を体験したのが、ゆみ子一人でないことを気づかせる。

その後、民雄の恋女房の件は夫婦喧嘩の種になり、結果として二人を近づけ、前夫の死を民雄にも語り易くする。そして、民雄から「人間は、精が抜けると、死にとうなるんじゃないか」(五)という答を聞き、彼女は前夫の死への執着から、少し距離を取ることができるようになる。

## 七 ゆみ子と作品の限界

ゆみ子の独自性は、前述したように、生を送りながらも死者を想い・見ることである。比喩的に言えば、彼女は死者とともに生きている。前夫の死の風景を思い浮かべ、「心の奥の、もうひとつの心に、雨あがりの線路の上をとぼとぼ歩いてるあんなのうしろ姿が、もうまざまざと映りつづける」(二)のように、彼女は「あんな」を生かし続けている。

その映像は、彼女に生きる力を与える。しかも、ゆみ子に反応して、「あんなが、前方から吹きつけてくる冷たい風に髪の毛をあおられながら、ときおり立ち停まって振り返るようにな」(二)る。もちろん、これはゆみ子の想像が為せることであるが、それは現実とどう違うのか。ゆみ子は事実を超えて、死者を見る。確かに、彼は何も語らないし、「どれほど力いっぱい抱きしめても、応じ返

してはくれへんうしろ姿やった。何を聞かれても、どんな言葉をなげかけられても、決して振り返らへんうしろ姿やった」(四)のように、空しい行為かもしれない。

しかし、前夫の不幸の实感が、彼女の死者への愛情を増加させる。そして何度も言うように彼女は、前夫への思いが自分を傷つけるとともに、支えであったことを知る。

最終場面で、ゆみ子は前夫に語りかける。

ああ、やつぱりこうやってあんなと話し込んでると気持ちがええ。話し始めると、ときおり体のどこかに、きゅうんと熱っぽ  
い痛みが湧いてきて、気持ちがええのです。(六)

彼女は痛みと快感の共存を実感する。

死者を想うことで、彼女は死者とともに生きている。だが、これは不安定な安定にすぎない。前夫にこだわりのながらも、同時に彼女は再婚後の生活に安住している。奥能登の荒々しさと自然の見せる幻の美しさのように、彼女の中で、不幸と幸福がバランスを保っている。

だが厳しく言えば、作品世界は前夫の自殺や荒々しい自然のエネルギーを含みながらも、主人公の見る・作る、生と死のあいまいな世界である。これがこの作品の特徴であり、限界<sup>7)</sup>であろう。

この作品は、生と死の狭間に生じる〈幻の光〉の発見と、それを見つめる人間の不幸と幸福を描いた物語である。

注

(1) (2) (3) 平井修成「宮本輝『幻の光』考―死の了解・死の経験―」  
 『常葉国文』31 2009・1

(4) (5) 酒井英行『宮本輝論』（翰林書房 1998・9）

(6) 注(1) による

(7) この点に関して永吉雅夫氏は、この時期の宮本輝の作品を、「ドラマの過程と表現したストーリーの展開は、ある種の図式化・パターン化に陥る危険性をはらんでいる」とし、「一種の予定調和」と指摘しているが、その傾向はあると思われる。「幻の光」にもそういう危険性があるが、ゆみ子の持つ二重性と幻を見ることが、この作品を救っているように。

永吉雅夫「『幻の光』から宮本輝論へ―従属的悲劇の主題化―」（『追手門学院大学国際教養学部紀要』3 2009・1）

〔二〇一三・九・二六 受理〕